

所属 高知西高等学校

氏名 村田 恵子

RG SH4

1 研究の背景

本年度私は英語 を2講座担当している。研修では「発展クラス」の授業の改善に取り組みたい。

現在までのところ、授業は非常にスムーズに進んでいる。大半の生徒が中学校までの内容を概ね理解しており、授業への取り組みも真面目である。しかし、生徒が授業中に基本的な中学校既習の単語が理解できず、英文の内容がわからないという場面も度々あった。また、音声ではその単語が理解でき、その語が用いられた質問に適切に応答するにもかかわらず、書かれているその語は理解できないという生徒も少なからずいる。これらの経験から語彙の定着の必要性を感じるようになった。生徒は大きな声で音読をすることができる。指示した予習や時折行う小テストへの取り組みも良好である。

2 リサーチクエスチョン

基本語彙を定着させるにはどのようにすればよいか

- ・ 中学校で既習の単語の意味を完全に理解し、読み・書きできるようになる
- ・ 英語 のテキストで学習する単語を身につけ、語彙力を伸ばす

3 予備調査

定期考査の前期中間テストでは語彙の問題の正答率は75%で全問題に対する正答率とほぼ同じであった。生徒アンケートによる自分の語彙力の自己評価では、75%の生徒が自分の語彙力は中学校3年生以下だと考えている。英検3級取得者は40%。望月テストにより2000語までの推定語彙を調査。

4 仮説の設定

仮説1：単語の指導をする際、語法を絡めて指導すれば記憶に残るのではないだろうか。

仮説2：新しい単語に出会ったときには、繰り返し音読すれば覚えやすいのではないだろうか。

仮説3：中学校既習語を何らかのグループに分けて復習すれば定着するのではないだろうか。

5 計画の実践

仮説1に関しては、教科書各レッスンの単語を指導する際に、その語を使ったイディオムや例文も一緒に指導するようにした。仮説2に関しては、9月以降の授業ではそれまでの倍以上の回数新出語彙の音読練習をした。授業中の生徒の取り組みは良く、音読の声も大きい。各レッスンが終了後単語熟語のテストを4月から継続して行った。生徒は最近学習した内容については比較的良く覚えている。しかし、次の課に入ってから既習事項を質問すると答えられないことも多かった。そのため、授業中に以前に学習した語彙をよく問いかけ、学習内容の定着に力を入れた。

仮説3に関しては、文法を指導していくなかで基本的な動詞の変化が定着していないということが1年学年団の中で話題になり、学年の課題として取り組んだ。基本的な不規則変化動詞の活用を覚えることを夏休み明けの課題テストの範囲の一部とし、出題した。さらに、9月末の前期末テ

ストの範囲として同じものから再度出題し、徹底を図った。

6 実践の結果

	7月	12月
望月テスト(1000語レベル)で推定語彙900語以下の生徒数	4人	0人
英検3級取得者 (7月:既得者、12月:過去問で合格ライン以上)	40%	89%
生徒の自己評価 自分の語彙力が高1以上だと思う	25%	45%
自分の単語熟語力を伸ばす必要がある	45%	62%
生徒の授業評価 英語の授業が大変好き、またはまあ好き	82%	69%

7 結果の検証

望月テストによる推定語彙数では、1000語レベルで900語以下の生徒が0人になり、基本語彙の定着という目標に対しては良い結果であった。しかし、2000語レベルでは、平均の語彙数の上昇が130語程度と大きな向上は見られなかった。これは私が基本的な事項の徹底に重点を置き、応用力をつける指導が十分ではなかったのが原因ではないかと反省している。習熟度発展クラスであるということを考えれば、今後は基本事項の徹底を図りつつ教科書を応用させる内容もバランスをとって盛り込んでいくべきである。

中学校3年生レベルの力がついてきているか見るために、英検の問題も活用した。12月で89%の生徒が3級合格圏内というのは、概ね基礎力がついてきているのではないと思われる。

生徒のアンケートによる自己評価では、自分の語彙力に対する自己評価は高くなっている。しかしその一方、これから自分の語彙力を高める必要があると感じる生徒が増えている。教科書に出てきた単語をその時は理解できるが、英検や模試の長文になるとわからないという生徒の声とも関連があるものと思われる。

また、授業評価では7月に比べ英語の授業が好きだという生徒が減っていた。理由の欄には「英語は難しい」、「文法や単語を覚えるのが苦手」とう記述があった。

7 成果と今後の課題

基本語彙の習得という目標に対しては、良い結果が出た部分もあるが、学習内容が難化するためか英語は難しいと感じる生徒が増えているようである。また、12月の後期中間考査の誤答から生徒の中学校レベルの単語のつづり間違いが学年団で話題となった。そこで、数字や日付などのつづりを冬休みの課題として与え、休み明けのテストの範囲の一部とした。夏休み前もそうであったが、同じ学年を教えている教員が連絡を密にし、授業の課題や悩みを相談して学年全体で対応していくことが評価のこともあり、大事だと感じた。全体で取り組むと、フィードバックも全体でできる。

今回、このプロジェクトに取り組むことは、私にとって自分の授業と生徒の課題とを真剣に考える機会になった。生徒から授業の評価を得、客観的なテストで生徒の力を測ることにより、日々の授業の改善を心掛けた。また、新教育課程の現高校生が中学校でどのような英語の授業を受け、どのように英語を勉強してきたのかをもっと知って、高校での授業に生かさなければならぬと実感している。